



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	平成27年度北海道大学教育ワークショップの取り組み
Author(s)	山本, 堅一; 細川, 敏幸; 山田, 邦雅 他
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 23, 65-70
Issue Date	2016-03
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.23.65
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62237
Type	departmental bulletin paper
File Information	2307.pdf



A report on the 2015 Hokkaido University Workshop on Education

Kenichi Yamamoto,^{1)*} Toshiyuki Hosokawa,²⁾ Kunimasa Yamada,²⁾ Naoyuki Mikami,²⁾
Makoto Suzuki,²⁾ Makoto Kimura²⁾ and Jun Kamen²⁾

1) Center for Teaching and Learning, Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University

2) Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University

平成 27 年度北海道大学教育ワークショップの取り組み

山本 堅一^{1)**}, 細川 敏幸²⁾, 山田 邦雅²⁾, 飯田 直弘²⁾,
三上 直之²⁾, 鈴木 誠²⁾, 木村 純²⁾, 亀野 淳²⁾

1) 北海道大学高等教育推進機構高等教育研修センター

2) 北海道大学高等教育推進機構

Abstract — Hokkaido University began holding an annual two-day workshop on education for the faculty members in 1998. Since 2007, this workshop has been conducted twice a year, and its target participants have been young faculty members. This year we held three separate workshops. The purpose of this report is to explain what was done in the 2015 workshops, and to explore the challenges that remain to improve the workshops.

The first workshop, in June, had 29 participants from all over Hokkaido University, the second one, in September, had 27 participants from Hokkaido University and 8 participants from other institutes of higher education, and the last one, in November, had 17 participants from Hokkaido University and 3 participants from other institutes. This year's main theme was Active Learning, the same as last year. Each workshop mainly consisted of three sessions about the planning of courses, including lectures and group discussions, and other sessions.

This report mainly provides an overview of the three workshops and the results of questionnaires collected after each workshop.

(Accepted on 8 February, 2016)

*) Correspondence: Center for Teaching and Learning, Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, Japan

E-mail: yamamoto@c@high.hokudai.ac.jp

**) 連絡先: 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学高等教育推進機構高等教育研修センター

1. 北海道大学教育ワークショップの目的

北海道大学では、1998 年以来、新任教員研修の一環として全部局教員を対象とした「北海道大学教育ワークショップ」という研修を行っている。この研修は、全学教育科目の授業デザイン（グループ毎に考える架空の授業）をシラバスの作成を通じて行い、授業の設計方法とシラバスの書き方について、グループワークによって身につけることが大きな目的である。

今年度は3回開催し、うち1回は初めて学内開催という形式を取った。これには、平成19年度から年2回開催に増やし、一人でも多くの新任教員（北大に着任後5年以内の教員）が研修に参加できるようにしてきたという背景がある。加えて、これまでこの研修を担ってきた高等教育推進機構の研究部から、平成27年4月に設置された高等教育研修センターに実施主体を移したことにより、年3回の実施を実現した。

また、今年度のテーマは、昨年度に引き続き「学生主体型授業の設計」とした。近年、アクティブ・ラーニング型授業への転換といったことが求められており、時代の要請に対応するためである。

2. 日程とプログラム

今年度開催した本ワークショップの日程は、第26回が6月19、20日、第27回が9月8、9日、第28回が11月20、21日であった¹⁾。プログラムは3回とも異なるが、以下では第26回のプログラムを示す。

6月19日（金）

8:30	受付開始（高等教育推進機構 情報教育館3F スタジオ型中講義室）
8:45	開会・挨拶
9:00	バス出発【オリエンテーション（FDの意義、自己紹介）】
10:00	北広島クラッセホテル到着
10:05	ワークショップ「自分の教育観について考える」
11:05	レクチャー1「講義題目・目標の設定」

11:35	グループ討論「講義題目・目標の設定」
12:35	昼食休憩
13:30	中間発表「講義題目・目標の設定」
14:00	参加者のシラバス校正作業
14:20	ワークショップ「授業に関するQ & A」
15:20	休憩（シラバス提出）
15:30	レクチャー2「授業方略」
16:00	グループ討論「授業方略」
17:30	中間発表「授業方略」
18:20	夕食休憩
19:00	参加者のシラバス返却
19:00	ラーニングサポート室の紹介
19:20	懇親会

6月20日（土）

6:30～	各自朝食
8:30	各グループ修正作業
9:00	参加者のシラバス再提出
9:00	レクチャー3「教育評価」
9:30	グループ討議「教育評価」
10:30	休憩
10:40	作成したシラバス「学生主体型授業」の発表
11:30	講評
11:45	レクチャー4「教育倫理」
11:55	参加者のシラバス返却
12:00	修了証書授与式
12:15	バス出発【参加者・世話人の感想】
13:15	札幌駅到着、解散

本ワークショップは、授業設計において重要な「目標・方略・評価」の3つについて、それぞれレクチャーと討論からなるセッションで構成されている。その他、すべてのプログラム終了後に行う教育倫理に関するショートレクチャーは必ずプログラムに含まれているが、他のセッションは毎回異なる。今年度は、ワークショップ「自分の教育観を考える」は3回とも実施、「授業に関するQ & A」は第26回と第27回のみ実施し、夕食後のプログラムは毎回異なる。

第27回は学内開催だったため、移動時間がない分、休憩時間を増やすなど第26回に比べて余裕のあるプログラムとした。そして、1日目のプログラムは18時終了とし、夕食を取らずに終えているため、夕食後のプログラムと懇親会は行っていない。また、2日目の開始時刻を9時とし、終了は13時と

した。

第 28 回は、スケジュールに余裕を持たせるため、ワークショップ「授業に関する Q & A」は外し、休憩時間を長く取るなどの変更を行っている。また、夕食後は全学教育部長の授業実践に関する講演を行った。

第 27 回からは、参加者の動機付けのため、オリエンテーションの時間を 30 分取っている。

3. 参加者の感想

全プログラム終了後に行っているアンケートで、「本ワークショップの良かった点や改善すべき点など」を自由記述で尋ねており、以下のとおり回答があった。

第 26 回

1. いろいろとつめこんであった
2. 他学科の方と交流ができる点
3. 新しい講義を作る過程を短時間ではありますが、よく分かりました。もう少し時間があれば、もっとよいものができると思いました。異分野の先生方との交流ができる点もとてもよかったと思います。
4. インタラクティブな授業の実施には興味があったので、非常にためになりました。シラバスのづくり方はとても勉強になりました。もう少しゆとりのあるプログラムだとありがたいです。
5. パワーポイント、ポスター以外の授業で使えるプレゼン方法があればそれも試してみたかった。
6. 時間配分や交流しやすい雰囲気など良かったと思います。
7. (適切な) シラバスの作成設計プロセスを理解できた点は良かった。・新しい講義形式(アクティブラーニング等)を理解できたのは良かった。・スケジュールがタイトに感じた。
8. 改善すべき点: 個人の部屋がほしい。十分に休めなかった
9. 活発な議論を交えることができた点が良かったです。教育経験がないために、他の先生方がどのような点に気をつけてシラバス作成・授業を

行っているのかを教えてくださいました。

10. シラバスの作成について具体的に理解することができた
11. 知り、考える機会になったのはよかった。工夫は理想論としては考えられるが、時間の制約も多い中で、どう実現するのか实际的に受けられるサポートや機器の利用について lecture があるとよりよいと思います。
12. 他部局の教員と協力・交流できた点。教育学の専門家の方々からアドバイスをいただいた点。もう少し講評(フィードバック)などの時間を十分にとっていただけたら、より良いです。
13. 密度は高かったが参考になった。・久しく忘れていた学生の授業を受ける気分を味わった。・本題ではないが、グループとして意見をまとめる作業が難しかった
14. 時間的に余裕がほしい。
15. グループ討議やレクチャー間のタイムスケジュールがタイトで、疲労した。
16. スケジュールがタイトすぎる気がします。「学生主体型授業の設計」と「シラバスの作成」は分けて、ワークショップを行った方が良いような気がします。

第 27 回

1. 様々な分野の方と議論できた点は良かったと思うが、教育経験年数や教育経験の有無に大きな差があり議論にならなかった点があったのは少々残念であった。可能であれば似たような教育経験の方たちとディスカッションが出来れば良いなと感じました。
2. もう少し時間を長めにとってもよい感じがしました。
3. 全体的によくデザインされており満足しました。質疑の時間が欲しかった。「シラバスとは何か?」といった基本情報が欠けている部分があった(時間が足りなかったので仕方ない部分もあるかとは思いますが…)
4. とくになし
5. グループメンバーが 7 名というのは多い気がしました。時間配分は適切でした
6. 北大内で行っていただいたことで参加できまし

- た。ありがとうございます。自分のシラバスの添削がかなりあっさりしていたのもう少し手直しをしていただきたかったです。
7. 普段学部生向けの授業を担当したことがなかったので勉強になった。特に学生主体型授業の方法などを知ることができた。グループ間のコミュニケーションはよいが、他グループとの交流がほとんど行えなかった。
 8. 良かった点：グループの議論と全体の発表として、これからの授業をどのようにデザインすれば良いのかだいたい理解できました。
 9. ・FDの基本的な内容を学習できました。・ボリュームが少し多かった・グループ内で他分野の先生とディスカッションできた。
 10. 他グループのメンバーとの交流の場を設定してほしい。
 11. 最後にも少しあったが、質問タイム（各々が抱えている問題について議論する時間）がもう少しあると良かった。また、ADHDなどの学習障害についても、現況と対策のようなものがギロンされると良いと思った。
 12. 必要な設備・備品がそろっていて良かった。
 13. ・現在のシラバスの改善点を見つけることができ良かった。来年度のシラバスでは改善したい。・異分野の人々との交流が持て、刺激になりました。2日間ありがとうございました。
 14. ・専門科目についてのシラバス作成についての内容があってもよいと思う。・何故か、このような会で聞かれる例は、言い方が失礼であるが、かなりレベルの低い学生達ばかりなのではないでしょうか？北大の学生レベルがそのようなレベルでしょうか？実感がわきません
 15. シラバスの書き方に関する知識が付いたのが良かった。
 16. ・授業運営に関するヒントが得られた。・悩みが深まった。
 17. 学生主体型授業のやり方について、具体的な細部に関してももっと詳しく教えてほしい。
 18. ・「通い型」になったのは良かったと思う・あとは札幌以外からの参加者への配慮がすくないので充実させてほしい。ex) 開始が朝だと前日入りが必須・もうすこし時間を短くしてほしい
 19. グループ内の交流、ディスカッションは非常に有意義であったが、他のグループの方との交流が少なかったのは残念である。交流会などのお酒を飲む機会があっても良かったかもです。教育に対して頭の整理ができました。
 20. ・グループが変わらなかったのは良かった。以前に参加したFDでは、何度もグループメンバーが変わり、結局、一人の名前もおぼえられなかった。・授業方略は話が早くてよく分からなかった。
 21. グループワークを採用した点、グループ成員に多様性をもたせてくれた点が、とてもうまく作用したと思う。
 22. タイムスケジュールがよかったと思います。グループ内の分野が多様でおもしろかった。
 23. 非常に有意義だった。今回のような教育を受けないまま15年間も教員をやってきたことに驚く。全教員が受講すべきだと思う。あるいは、新任研修を手厚くした方がよい
 24. 良：ワークを通じて、①～⑧について体験的に学ぶことができました。改：他グループとの交流があるとよいと思います。
 25. 教育について考える機会をもらいました。
 26. 異分野の先生方と討論することができたこと。シラバス作成時の必要なことを学ぶことができたこと
 27. 講義パートで重点的なポイントではなさそうな時間はもう少し削れるのではないかと思います。（その分他の時間）
 28. 教育理念、教育の基本精神がより伝わるものであればよかったと思います。世話人の方を含め、何年、教師経験をつみ、その道で業績のある人間であったとしても、自身をふりかえり、謙虚に反省できる人間であることが、教師にとって最も重要な資質であり、その模範を示していただきたかったと思います。
 29. シラバスを作成したことはなかったのですが、具体的な目標設定の立て方や授業方略の策定の仕方や評価の方法などを知ることができて、実際に作成する際に、とても参考になると思いました。
 30. ・他の教員と交流できる。・学部の特异性を反

映しているので、実際的ではない。

31. シラバスの作成の仕方、意義についてはよく分かったが、その他の教員のニーズにも、もっと答えてほしかったです。相对評価の意義、方法については、よく分かりません。
32. 1) グループ交流とレクチャの繰り返しのバランスが良く、2) 少人数型の講義に対して、実際は大人数、知識獲得型の講義が圧倒的に多い。後者をベースにした FD もあってよいと思う。

第 28 回

1. 1 泊するのは負担が大きいので、1 日大学で研修を行い、希望者で懇親会というスケジュールの可能性を考えてほしい
2. This workshop was good because we were given time to think about “WHY” we do what we do. We also had time to learn “WHAT” do and “HOW” to do it.
3. 全体の流れを始める前に概説してもらえればよかった
4. ・PC が 2 台あったほうがやりやすいと思った。(ワードと PPT) ・宿泊が 2 人部屋なのは、お知らせに明記されていた方がよいかと思いました。・土産が何を想定しているのかわかりにくかったです。(冷蔵庫の有無)
5. 本ワークショップが想定しているような授業を行うことが近い将来予定されていないので、自分がこれから授業を行う際の参考になるかどうか、疑問に思うことも多かった。
6. 他のグループの人ともう少し交流できると良かった。「学生主体型の授業」についてあまりきけなかった気がします？(シラバスの書き方だったので)
7. ①大人数の授業についても方法や授業計画を教えることです。②シラバスだけではなく、授業の進行についての知識を獲得したいと思います。
8. 濃い内容で考えることも多く大変でしたが、実り多い研修となった。
9. 討論の時間がちょうどよく設定されていたので楽しみながら作業することができました。
10. 自分の教育観について考えるチャンスになっ

た。シラバスの作成方法を学ぶことになった。

11. 北大の一般教育演習を想定している点が参考資料としては狭い気がする(多くの新任教員は北大に最初から就職しないため)北大の受講者は、皆、まじめに授業を聞くため他大は必ずしもそうではない
12. 部屋は個室として欲しい。
13. グループ学習の時間が限られているのは、時間内に作業するという意味では良かったが、プレゼン資料の修正などは時間外にしても良かったのではないか。

4. まとめと今後の課題

最初に述べたとおり、本ワークショップは実施主体を高等教育研修センターに移したことにより、プログラムの作成等は主にセンターの専任教員が過去のプログラムを参考に行っており、今年度は試行錯誤しながら毎回プログラムの調整を行った。

第 26 回は時間に対してプログラムを詰め込み過ぎており、参加者アンケートの結果からもその点は明らかであった。ワークショップへの参加動機は半数近くが義務的であり、自ら進んで参加しているのは 20%未満というアンケート結果も踏まえ、第 27 回では休憩時間を増やし、オリエンテーションの時間を 30 分取って、2 日間の研修に対する動機付けを試みた。その結果、「研修時間は適切だった」というアンケート項目に対する回答は、5 件法で平均値 3.41 から 3.88 まで向上した(当然ながら数値の単純な比較はできないが、参加者の感想でも研修時間に対する不満は減っている)。

第 27 回は宿泊型ではなく通い型にしたことで、夕食の前に 1 日目を終了したため、懇親会も開催しなかった。これにより、「他の参加者との交流は十分できた」というアンケート項目に対しては、平均値 4.00 から 3.06 へと大きく下がっている。宿泊型の場合には、懇親会は自由参加としているが、多くの参加者が出席し、グループ外の参加者と交流をしている。第 26 回で言えば 18 部局から参加者が集まっており、異分野の研究者と交流を深める貴重な場として毎回好評を得ている。来年度は、通い型の

場合でも、希望者を募って懇親会を開催するよう検討したい。

第28回では、第27回で取り入れたオリエンテーションを継続するため、シラバスの作成とは直接的に関係のない2つのワークショップのどちらかを削って時間を確保する必要があった。そこで、第26回、第27回のアンケート結果の満足度を比較し、「授業に関するQ & A」をやめて、「自分の教育観を考える」のみ実施した。1時間のプログラムをやめる代わりに30分のプログラムを取り入れたことで、第26回に比べて全体的に時間の余裕ができ、休憩時間も増やすことができた。「研修時間は適切だった」というアンケート項目に対する回答は4.10と、3回の中で最も高い平均値になった。

「ワークショップは全体的に満足できた」というアンケート項目に対する回答は、第26回から順に3.97, 3.94, 4.25となっており、第28回が最も高い。第26回と第28回との違いは、スケジュールのタイトさを緩和した点が最も大きい。1日半という短い研修で少しでも多くのことを学んで欲しいという気持ちから、1つでも多くのプログラムを入れたのが主催者側の心情ではあるが、義務的に来ている参加者が毎回半数近い²⁾のと、異分野で初対面の教員同士のグループワークが中心に進んでいくことを考慮すると、高い負荷をかけるのは学びを阻害することに繋がるものと考えられる。

以上を踏まえると、来年度の本ワークショップについては、第28回のプログラムをベースにブラッシュアップしていくのが良いと考えられるが、たと

えばレクチャーパート3回(各30分)をビデオ教材にして事前学習を促し、当日はもっと質疑応答の時間を取り入れることなども検討したい。

今後の課題として最も大きな点は、本ワークショップの効果検証にあると考えている。ワークショップではグループで考えた仮想授業のシラバスを作成することで、授業デザインとシラバスの書き方を学んでいるが、研修後の参加者の行動変容にどのような効果をもたらしているのかは、追跡調査を必要とする。これは本ワークショップに限ったことではないが、研修受講時の満足度ではなく、受講後の行動変容こそが研修の目的である。追跡調査は他の要因も入ってくるため容易なことではないが、何かしらの調査を行い、その結果を本ワークショップの改善に役立てていくことが、受講者の増大にとっても重要になるだろう。

注

- 1) 参加人数は、第26回から順に29名(学内18部局から29名)、35名(学内15部局から27名、7他大学等から8名)、20名(学内13部局から17名、3他大学等から3名)となった。
- 2) 第26回から順に45%、49%、40%が「義務的に」と答えており、「自分から進んで」と答えているのは、17%、17%、10%となっている。なお、残りは「他人に勧められて」である。